

カンボジアの都市と農村における選挙運動

秋保 さやか

Column

二〇〇三年

の総選挙以降、カンボジア人民党（以下、人民党）の圧勝が続いたが、今回の選挙で野党救国党が躍進し、カンボジア政治はひとつの転換点をむかえている。このような変化を、政治の表舞台に立つことのない農民や若者といった一般のカンボジア国民はどのように眺め、そして経験したのだろうか。これまで人民党政権の安定を支持してきたもののひとつは、強固な党組織、党員のネットワークであった。農村部においては、選挙権をもつ村人の名簿が作成され、選挙が近づくとそれをもとに党組織は票を読み、今後の選挙活動の展開戦略を練る。カンボジア南部タカエウ州T村では、名簿は人民党支持者をあらわす「白」、野党支持者をあらわす「黒」、まだ支持政党を明確にしていない者をあらわす「グレー」の三色に分けられていた。

人民党から支持者に対する贈与のための集會も、選挙恒例の光景である。その集會は村の党組織によって催され、党員のなかのグループ長らがこれに参加した。集會が始まると、国の安定と発展に寄与した党の功績が説明される。

そして選挙日には「人民党」に、文字が読めない村人には投票用紙の党番号である「四」に、投票するよう呼びかけられ、その後党員にサロン（女性が日常的に着用する布）が配布されるのである。

この集會には参加せず、サロンが配られる様子を眺めていた「グレー」の村人（四〇代女性）は、党の熱心な選挙運動に關し「光は暗闇をつくるものだ」と話した。彼女は、選挙活動で見落とされてある村の暗闇の部分こそが重要であり、救国党の方は私たちの暗闇を知っている⁽¹⁾のだという。

人々の「色」と実際の信条は常に一致しているわけではない。党組織に常に協力的な「白」に分類される村人（四〇代男性）は、「（人民）党を支援しているのは村の中で生活しやすくするため、心のなかでは野党を支持してい

る。このままでは金持ちは金持ちのまま、貧しい者は貧しいまま変わらない」と語った。

筆者が都市から農村に向かう乗り合いタクシーに乗車していた時、運転手と三人の乗客の間で次のような会話が交わされた。

運転手（五〇代男性）の所有する車には人民党のステッカーが貼ってあった。道中、「変えるか、変えないか！革命だ！」「七（投票用紙の救国党の番号）！」と声高に叫ぶ救国党の選挙運動の若者らを窓から眺め、彼は「変えてみる」とつぶやいた。それに対し、ベトナム国境のカジノに出稼ぎをしている農村出身の乗客（三〇代女性）は、Facebookに彼女の友人がアップロードした救国党の選挙活動の動画を周りの客に見せながら、プノンペン⁽²⁾の若者達が人民党の選挙運動に協力して、救国党を支援するための資金を稼いでいる投稿を紹介した。そしてこのようにSNSを通じ毎日全国の若者が選挙に関する情報交換を行っている⁽³⁾と話した。

会話のなかで、人民党支持かと尋ねられた運転手は「以前は熱心な支持者だったが、生活は何も変わらない。もし救国党が本当に

（掲げている政策を）実施できるならば、みんなの生活が良くなり、客も増えると思う。だから今回は救国党に投票しようと思ってる。変わったところが見てみたい」と話した。

今回の選挙運動では、党員への物資の贈与というこれまでの選挙と変わらない光景もみられたが、「強固」だとされた党の支持基盤である党員らの内面には「揺らぎ」が生じていた。その「揺らぎ」を引き起こしたのは、彼らの変化のみにない生活への憤りとよりよい生活への希求であった。そして、野党支持層の拡大を促した、若者世代に急速に普及するソーシャルメディアの存在も見落とすことができない。

このような都市と農村を巻き込んだ大きなうねりのなかにあるカンボジア政治のマクロ、ミクロレベルの展開を今後も注視していかなければならないだろう。

（あきは さやか／筑波大学大学院人文社会科学研究所、日本学術振興会 特別研究員）

《注》

(1) 平和や安定、経済成長に政策の焦点がある人民党に対し、救国党は、農民、若者、工場労働者、公務員、高齢者の生活向上に関する政策を掲げている。